



奄美群島で最古 下原洞穴で 土器発見！

下原洞穴遺跡の**13,000**年前の層から、**日本最古級の土器が出土！**当時は氷河期が終わって暖かい気候になる途中、今より海面が70メートルくらい下だったので、島の面積は1.5倍くらいありました。気候は今より3℃くらい低く、現在の屋久島、種子島に近い気候や植生だったかもしれません。また、日本列島は、瀬戸内海が陸地となり、本州、四国、九州はつながっていて、全国に2万人あまりの縄文人が暮らしていたようです。徳之島の人口は、多くても20~30人くらいで、奄美大島や、沖縄本島など周辺の島を移動しながら生活したようです。



隆帯文土器が出土した意味とは？

下原洞穴遺跡ではこれまで、7,000~9,000年前に作られた、**南島爪形文土器**、**波状条線文土器**などが出土していました。一方、13,000年前ごろ、縄文時代開始期の土器、**隆帯文土器**は、現在の本州、四国、九州（当時は全部つながっていた）の主に太平洋側と、長崎から出土していました。縄文土器ではもっとも古いタイプのもので、琉球列島までは伝わっていないとされていました。が… 徳之島で発見されたことによって、縄文時代の初めのころには、すでに土器を作る技術を持った狩猟採集民が渡来し、琉球列島に住んでいた可能性が出てきました。縄文人は意外と？しっかりとした航海術を持っていたのかもしれません。

周辺の島々との関係

北には、奄美大島、加計呂麻島、請島、与路島がつながった大きな島、南には現在の沖縄諸島、伊是名島や渡嘉敷島など周辺の島々と沖縄島がつながった広大な島がありました。徳之島から、北へ与路島周辺まで20キロ、南へ沖永良部島周辺まで30キロほどで、一日あれば海を渡ることができたようです。また、当時の黒潮は徳之島の西側を流れていなかったので、海を渡る際に、海流の影響が小さかったのでは？

謎の巻貝と秋利神の地形

汽水域の貝類イシマキガイや、陸生の貝類オヤマタニシ、オオシマヤマタニシのほか、現在の秋利神には生息していない**トウガタカワニナ**の一種の殻が、たくさん出土しているのです。このカワニナは大きく、河口近くの干潟になるような、泥の上で生活する種。当時の秋利神は、1キロほど沖に海岸線があり、もしかするとマングローブのような場所があったかもしれません。なぜか二枚貝はほとんど出土していません。貝毒を知っていて忌避していたのでしょうか？もしかすると、洞穴よりずっと下、当時の海岸には、捕つた魚介類を食べるキャンプがあつて、その遺跡は現在、海中で眠っているのかも？！

もっと情報が見られる
電子版はこちら

